

## 書 評

AURELIUS AUGUSTINUS, SELBSTGESPRACHE ÜBER GOTT UND DIE UNSTERBLICHKEIT DER SEELE. (SOLILOQUIA, DE IMMORTALITATE ANIMAE, Latine et germanice) Gestaltung des Lateinischen Textes von Harald Fuchs. Einführung, Uebersetzung, Erläuterungen und Anmerkungen von Hanspeter Müller, pp. 298. Artemis - Verlag, Zürich. 長 澤 信 壽

これは Die Bibliothek der Alten Welt の一冊であって、その出版の予告を見て注文し、それがようやく私の手に入ったのは昨年の4月であった。しかし copyright を見ると1954年になっている。今さら書評に取上げるのはやや時期を逸したきらいがあるので、多少躊躇した。しかし本文の割合に長い序文がついていて、それが非常にすぐれていることと、私が以前からアウグスティヌスの Soliloquia に特別の関心をもっているという理由とから、とにかくここに紹介することにした。私が Soliloquia を始めて知ったのは西田幾多郎先生の著書のなかであったと思うが、この小著の重要性について教えられたのも先生であった\*。それは昭和5年の頃であるが、爾来この書物は“告白”とともに、アウグスティヌスの数多い著作のなかでも、私の最も愛着を感じているものである。

ここに取上げた Selbstgespräche usw. は全体 pp.298 のうち p.46 まだが序文、pp.47—201 がSoliloquia の羅独対訳、pp.203—257 が De immortalitate animae の対訳、pp.259—298 が附録、注釈等になっている。左ページのラテン本文は Saint Maur 版を土台として、H. Fuchs が厳密に校訂したものであって、Migne 版をそのまま翻刻した P. Labriolle の羅仏対訳本にはるかにまさり、私どもが今日容易に手にし得る唯一の、学問的に校合された原典であろう。

序文、独訳その他は H. Müller の手になったものである。この序文は短いものであるが、カッシキアム時代のアウグスティヌスの哲学を極めて犀利に分析し、問題の所在を明らかにしている。アウグスティヌスその人が古典古代の教養を深

\*拙稿“西田先生と聖アウグスティヌス”知と行、大東出版社、昭和24年12月。

く身につけた、当時の典型的知識人であったが、この序文の著者も非常に広い視野に立って、絶えず古典古代の文化、なかんずくギリシア哲学およびローマ文学を顧慮しながら論述を進めている。著者によれば、偉大な思想家というものは自己の信念に言語的表現を与えるものであって、そこにわれわれがはっきり認めることのできるところの、生と文学的創作の統一があるのである。これからして、アウグスティヌスの場合にも、彼の生涯、彼の思想の叙述、上記二作品の考察という三つの課題が出て来る。

A. 彼の生涯。この節においては聖アウグスティヌスが回心の後、胸部疾患を医すためカッシアクムで静養し、*Soliloquia* を書くに至る頃までの内のおよび外的な生活過程が辿られる。彼の精神的発展、特に彼の回心において、キリスト教を象徴する彼の母モニカの務めた役割が極めて重く見られている。“彼が母の理想から離れるに従って、彼は信仰からも、従ってまたキリスト教からも離れた”と序文の筆者は言っている。彼がカルターゴからローマへ行ったのも、母の監督が自分の精神的発展に妨害になると考えて、それを逃れるためであった。彼女は涙を流して彼を自分に結びつけておこうとしたが、彼は彼女から逃れた。彼女は彼を追うてローマへ、ミラノへ行った。彼女の愛が沈黙していればいるほど、その非難は彼の心を苛んだ。私はかねがねモニカがアデオダツスの母を去らしめたことに理解しがたいものをもってしたが、この筆者は、それを問題としてはいない。ともあれしばらくの間も純潔な生活を維持することのできなかつたアウグスティヌスは、自己の道徳的な弱さに対して、内心で深く自己に嫌悪を感じた。彼は心の奥底では母の正しさを想った。ポンティキアヌスの物語その他が彼の心情に強く訴えたのは、彼が心でそういう状況にあった時であり、そういう状況のためであった。倫理的な節度への無意識的な決心がそのなすべきことをなした。パウロの要求が満され、アウグスティヌスは母の信仰に身を委ねた。そういう風にアウグスティヌスをキリスト教に導いたものはモニカの“愛情”(Affekt)であった。この愛情が彼を母に結びつけ、キリスト教が彼を望んでいると言わしめたのである。けれども、この愛情は彼の“知性”(Intellekt)と矛盾した。それは知性が、キリスト教の或る種の表現を、愛情がそれを迫るにもかかわらず、受け入れようとしなかつたからである。従って知性は愛情の対象であるキリスト教と離反した。そして長い間の不安の後、回心の瞬間にこれが結合統一された。

筆者 Müller はアウグスティヌスの回心に至るまでの精神的発展におけるモニカの役割を重く見ているが、それを唯一のものとしているのでは固よりなく、修辭

学、マニ教、懐疑主義等々がつとめた役割にもそれぞれページを割いている。ところで私は二つのことに注意しておきたい。アウグスティヌスの精神的巡歴において、彼が常に求めてやまなかったものは、合理的な世界観であった。美も、アウグスティヌスにとっては、合理的・理性的なものでなければならなかった。彼の知性が、乳とともに吸った聖書を受け入れることができなかったのも、文体の単純さとともにそこに書かれていることの非合理性であった。このことは実は当時のアウグスティヌスにはまだ聖書を解釈する力がなかったことを意味する。ところで彼をアムブロシウス、ポンティキアヌス、シムブリキアヌスと知己にしたのはモニカであった。Müllerによれば、ミラノにおける3年は、30歳のアウグスティヌスに重要な体験をもたらした。それは彼がアムブロシウスによってアレゴリーの聖書解釈を学んだことである。アウグスティヌスはこの技術によって聖書の言葉の一つ一つを *umdeuten* し、その援けによって旧約の物語の意味を明らかにすることができたのである。著者がこの点に着目し、短い序文の中でそれを強調していることは卓見であると言ってよいと思う。しかし聖書から離れてただアレゴリーの解釈ということであるならば、おそらくアウグスティヌスはアムブロシウスに会う前、既にプラトーン、キケロー、ストア派等々からそれを学んでいたであろう。

もう一つは今迄に幾度も論じられた386年の彼の回心が、彼の“告白”が言うように、キリスト教への回心であったか、それとも新プラトーン主義への回心であったかという問題である。それについて、Müllerが、46歳の時、教父としての立場からなされた12年前の回心の告白を、無批判に信じてはならないと警告しているのは当然であろう。回心直後の著作はキリスト教への回心については殆んど語らず、新約聖書の引用も *Soliloquia* ではただ五回、*De immortalitate* では、一回も見出されない。Müllerによれば、彼の回心を規定したものは内容的には新プラトーンの・キケロー的・キリスト教的折衷主義であり、世界観としては彼の回心は全く新プラトーン主義或いは新プラトーン主義的色彩を有する通俗哲学 (*Populärphilosophie*) へのそれであった。彼がキリスト教を自分のものにしたのは、それよりもずっと後、しばしば“第二の回心”と称せられている391年すなわち彼がヒッポの司教に挙げられた年であった。

B. 哲学について。Müllerは、上述のように、カッシキアタム時代のアウグスティヌスの哲学を折衷主義とする。この点私は彼と考を異にするが、しかし折衷主義又は通俗哲学と言ってもそれは決して安易な妥協を指しているのではなく、

内的闘争と苦悩と憧憬のうちにあつて正しいものを発見し、真理を認識し、それに従つて生きようとする意志が、その始まりとなつてゐる新アカデミー派のものである。周知のように彼がまず企てたものは、懷疑説の批判と至福なる生の探究であつた。かくして彼が到達した立場は、如何なる懷疑も、それが懷疑として可能であるためにさえ、認めなければならない cogito 的立場であつた。至福なる生はこの知的な立場において成立する。Müller はこのような立場を合理主義と呼んでいる。アウグスティヌスは、認識の道として、プラトーンの想起説を採れ入れた。しかしやがて照明説 (Erleuchtungslehre) が彼の心に芽生えて来る。しかも想起説と照明説との間には越えることのできない罅隙があつた。筆者 Müller はこの両説の共通点と相違点を述べて、所動的な照明説はパウロの恩寵論につらなつてゆくものであると言つてゐる。

ところで認識の目的は真理である。Müller はただ聖書の言葉に従つて真理は神とされると言つてゐるが、そこにはなお深く掘り下げてゆくべき問題があるであらう。彼によれば verum という語をアウグスティヌスは二つの概念に対して用いてゐる。その一つは論理学の領域から起つて来た verum の概念であつて、これは主観的な立言が客観的な事実に対応するものである。第二は存在論に属する實在的 (wirklich) の概念であつて、これは客観的事実が存在するというを示す。この第二の意味の真理は第一の意味の真理と係わるところがないのであつて、それ自体永遠の価値を有するものである。第一の真理は、すべての真理がそうであるように、それを思惟する主観が存在しなくなると、存在することをやめるであらう。

アウグスティヌスにあつては神は真理であるから、真理論は当然神論に導いてゆく。神は認識の内容をなすものであるが、筆者によると“アウグスティヌスは神という名のもとに非常に多くのものを認識し得ると信じる”。アウグスティヌスにおける最も困難な問題の一つは、上記の第二の存在論的真理としての神と“感情に対応している神”即ち“聖書の神”との関係、真理としての神と人格としての神、知性の対象としての神と信仰の対象としての神の関係である。Müller も勿論この困難を自覚してゐたと思うが、カッシキアム時代のアウグスティヌスの哲学を扱うことにその論述の範囲を限定している著者は、アウグスティヌスが神と名づけられる人間学的理想像には徹頭徹尾満足しなかつたと告げるだけで、その問題に深く立ち入っていない。そして“それ故に彼はプロティーノスと共に、神とは何であるかという問いに、一義的な答えを与えることを拒む。この意味の神が人間の理性の対象でないことは自明である”と言つてゐる。しかしこの問題はここのよう

に簡単に片づけられないのはもとよりであって、彼の洞察の不足と叙述の不徹底を思わざるを得ない。

ところでここよりして、Müller は秩序の問題を導き出す。秩序は神の存在から流出して来るところの世界の法則である。この秩序の中にあるものはすべて必然的に善であり、善としてそれはまた美でもある。善と美とは最高の形相すなわち神の秩序においては一致する。プラトーン主義者としてのアウグスティヌスは、世界の秩序を美しい世界の基礎となした。秩序の問題を軸として、一方では悪の問題、他方では調和の問題が展開されるが、神の人格性の問題、従って信仰の問題を徹底的に追究しなかった Müller は、ここにおいて悪と罪との関係を見落す結果となった。アウグスティヌスには一見したところ互に相容れない、矛盾した一面があるが、これが“神は認識されるか”と言う問題においては、直視 (Vision) と知性的認識という姿をとって現れる。“最高の認識は直視である”。この直視は神秘主義に連るものであって、神秘主義者モニカを母としていたアウグスティヌスに、神秘主義への素質のあったことは疑いない。Soliloquia, I, 13f. においては、実際、彼は直視の脱我的性格を認めてはいるが、しかも同時に神秘的・脱我的なものを合理化しようとした。特に彼はカッシアタムにあった時代には、感情生活から発する直視を完全に合理化しようとした。Müller が魂は精神の眼をもって神を見ることができると主張する照明説を“合理化された直視”，“合理化された神秘主義”と呼んでいることは、アウグスティヌス哲学全体系の弁証法的性格と考え合せて、深い意味をもつものであろう。

次に Müller はアウグスティヌスにおける美の学説に触れる。周知のように彼の最初の著述は *De pulchro et apto* であった。これは今日散逸してしまったが、新プラトーン派の、なかんずくプロティノスの“美について”の、強い影響のもとに書かれたことは疑いない。“アウグスティヌスの美学は無条件的に rational である”と Müller は言っている。この際 rational “合理的”であるよりもむしろ“ratio 的”を意味する。ratio (理性) は数学的・論理的であるとともに、分散しているものを結合し、多様に秩序を与えて、より高い統一を見出す力である。感覚の多様も理性の統一によって認識にまで高められるのである。真と美とは不可分の概念であって、理性は真理を把えて美として啓示する。美は統一の象徴であり、神的真理の象徴である、アウグスティヌスは美しさを色彩や音ではなく、均斉を理性的に創り出す形態に見たと Müller は考える。形態においては矛盾と対立が統一されて調和を造るのである。アウグスティヌスの美学説を述べた数ページはこ

の序文のうちの最も美しいページであって、“人はここに、如何に深く存在論と美学とが、アウグスティヌスにおいては、結合せられていたかを理解するであろう”という言葉は、Müller の立場を暗示するものと受けとられる。

C. この著作の成立と著作の年代。Soliloquia の巻頭は明らかにキケローの *De oratore*, *De inventione* の影響を示しているが、一般的に言って、アウグスティヌスの用語法も、文章法もまた、語彙も、非常にキケローの影響を受けていることは周知の通りである。Müller はアウグスティヌスが、自由なキケローのような仕方、キリスト教徒として哲学しようとしたと言っている。アウグスティヌスがキケロー的な、純粹のラテン語を用いたことは、同時に彼が後期ラテンや平常語ラテンの形式をほどほどにしたこと、まだ聖書の言語が重要ではなかったことを意味する。Müller はキケローの文体の特徴が如何にアウグスティヌスに見られるかを例示している。そしてこれが更に溯ってプラトーン以来の伝統につながると言っているのは正しい見解である。

Soliloquia は“アウグスティヌス”と“理性”との対話である。“理性”が対話を導く人物である。この“アウグスティヌス”は感性的人間的性質を、“理性”はそれの対立者を表わしているが、言うまでもなくこれは同じ一人のアウグスティヌスの両面なのである。対話の主題は“神と魂”である。アウグスティヌスの対話的著述は激励的な序論、対話部、終結部の三つの部分から成り立っていることが通例であるが、Soliloquia には終結部が欠けている。それはアウグスティヌス自身が言っているように (*Retract.*, I, 4, 1), 未完成な対話篇だからである。そして *De immortalitate animae* が、実はその終結部を書くための備忘録 (*commonitorium*) であったのである。しかし *De immortalitate animae* も Soliloquia とともに遂に完成しなかった。Müller はその理由として、真理、理性、魂の不死という問題の連関が不明瞭であったこと、また *Retract.* I. 5. 1 に言われているように、完成しないうちにアウグスティヌスの意志に反して流布したことをあげている。

そういうわけで Soliloquia は未完の対話であるが、*De immortalitate animae* をその終結部と見る場合には、他の対話篇よりも整っているものと見られる。Müller はこの篇の“祈り”を終結部にまさるものとしている。この“祈り”はその崇高さにおいて“ラテンの言語芸術のうちで最高のもの”と言って激称している。この対話篇はアポリアに終わっている。けれどもアウグスティヌスはこの祈りによって彼の考を残るところなく言い表わした。彼は自分の熱望を呼びかけの形で、論証したいと望んでなし得なかった教理を神の述語の形で、理想として見てはいたがまだ知

識として精通していなかったものを神のものとして、祈った。対話と祈りとどちらが客観性をより多くもっているかは別として、アウグスティヌスは祈りにおいて、自分の理想が神において実現せられるという満足をもったのである。従ってアウグスティヌスが、合理的な対話においては、自分の力で解くことのできないアポリアに達した時、初めてこの祈りを創作したということは充分考えられることである。“彼は「ソリロキア」を祈りで総括し、祈りでこの対話を完成した”と Müller は言っている。

Soliloquia (独語) という言葉はアウグスティヌスの新造語であるが、独語を対話の形で書くことは後期古代 (Spätantike) 文学の特色である。Müller によればこの技術はもともと論争文学 (Diatribenliteratur) に由来するものであるが、後期古代には瞑想、自省、反省がこの形で書かれるようになった。これは当時の政治と世間の情勢とに失望した思想家が自己自身に帰って、魂の声に耳を傾け、これを独語の形で言語に表現したからであろう。昼間自分の行ったことを、夕べ、静かに反省することを求める通俗哲学的要求と、それから起って来たキリスト教の夜の祈りとが、自省を援けたと Müller は言っている。アウグスティヌスの場合もその例外でなかったことは、De ordine I, 6, Epist. III, 1 などによって示される。“それ故に後期古代的な自省の実行がアウグスティヌスの「独語録」を養った源泉の一つであった”。「独語録」の巻頭の祈りは夜の祈りを暗示するものである。

最後に Müller は Soliloquia の系譜としてプラトンの対話篇を始め、ワルロー、リーウィウス、セネカ、特にキケローの“トゥースクラヌム叢談”をあげ、前にも触れた ratio のアレゴリーに言及している。アウグスティヌスはプラトンのキケロー的対話の技術を独語の叙述に適用し、始めて、理性の大きなアレゴリーをもって Soliloquia を自由に創作したと彼は言っている。

著作年代に関しては Soliloquia が 386 年、それにおくれて 387 年に De immortalitate animae が書かれたことに、問題はないであろう。

最後にこれは対訳本の書評であるから Soliloquia の巻頭の二三行を抄出して訳例を示そう。

Volventi mihi multa ac varia mecum diu, ac per multos dies sedulo quaerenti memetipsum ac bonum meum, quidve mali evitandum esset, ait mihi subito sive ego ipse sive alius quis, (sive) extrinsecus sive intrinsecus, nescio : nam hoc ipsum est quod magnopere scire molior, ait ergo mihi Ratio : Ecce, fac te invenisse aliquid : cui commendabis, ut pergas ad alia?—Augustinus : Memoriae scilicet.

この〈sive〉はA. Dyroff の校訂に従って Fuchs が加えたものである。このラテン文の独訳。

Wie ich mich lange Zeit mit den verschiedensten Gedanken trug und viele Tage ernsthaft mich selber suchte und was für mich ein Gutes sei oder ein Übel, das es zu meiden gilt, da sagte plötzlich zu mir—vielleicht ich selber, vielleicht ein Zweiter, in mir oder ausser mir (ich weiss es nicht, und doch möchte ich gerade dies so gerne wissen...) —nun, da sagte zu mir die *Vernunft* : Merk auf! Nimm an, du hättest eine Entdeckung gemacht: wem willst du sie anvertrauen, um zu anderem weiterschreiten zu können?—*Augustinus* : Dem Gedächtnis doch am besten.

これと比較するため P. Labriolle の仏訳を引用しよう。但し Labriolle の原典では勿論〈sive〉はない。

Depuis longtemps je roulais mille pensées diverses ; oui, depuis bien des jours, je me cherchais ardemment moi-même, je cherchais mon bien, et le mal à éviter, quand soudain j'entendis une voix (était-ce moi-même? était-ce une voix étrangère? et venait-elle du dedans ou du dehors? je ne sais, et c'est justement à le démêler que tend tout mon effort).

Voice ce qu'elle me dit :

LA RAISON.-Eh bien? Suppose que tu aies trouvé quelque chose : à qui confieras-tu tes découvertes, pour essayer d'en faire d'autres?

AUGUSTIN.-A ma mémoire, naturellement.

次に参考のために高桑純夫氏の訳を添えておこう。

“ずっと永年のあいだ、思へばさまさまのものごとに瞑想を凝らしてまゐった私です。それをまたこの頃では、もう一すぢに「わたくし」を追ひもとめ私の善をたづね、避くべき悪を問ひ訊すのに夢中になってゐるやうな私でした。ところへ、何の前触れもなしにやってきて、だしぬけに話を仕掛けてきたものがあるのです。それが果して「私」自身だったのでせうか、それとも私の内の、或ひは外の何者かだったのでせうか、この点どうもはっきりとはいたしません。が、それが何であるかは私のぜひ知りたいと思つてゐるところなのです。ところで彼はかう申しました。

理性 おい君、ひとつかういふ假定をやってみたまへ、君が勉強して何かあること柄を見つけたってね。そこでこんどは、そいつから別のものへ進みたいと思ふと君はそれを何に委ねてゆくだらう。

私 もちろん記憶に委ねます。”

長澤信壽著 アウグスティーン哲学の研究

5頁+360頁 昭和35年3月 創文社刊

泉 治 典

本書は七つの論文よりなる。1. 懐疑の克服。2. 至福なる生の概念とその認識論的基礎。3. 確実性。4. 神と真理。5. 知性と信仰の問題。6. 内的人間と外的人間。7. ベラギウス論争。

この御研究はわが国におけるアウグスティーン研究の初めての成果であり、中世哲学のみでなく、ひろく哲学の研究に携わる者にとって必読の書である。「初めての」と言ったのは、これまでアウグスティーンに関してまとまった研究が全くなかったという意味ではない。だが、これほど原典に即して問題がたてられ、これほど徹底的に考え抜かれた研究がわたくしどもに与えられたのは、ほんとうに初めてなのである。先生は原典に即しつつ徹底的に考え抜かれた結果、注目すべきかかずの独創的把握を示されている。従ってこれを明かにすることは、このような専門誌の書評に課せられた義務であろう。もちろんわたくしにそれを果すだけの能力があるとは到底思われない。それゆえ、この書評で誤謬や誤解があるばあいには先生の御寛容と御教えを心からお願いする次第である。

アウグスティーン（以下ア. と略す）の哲学全体の体系的構成のためには、創造、歴史、時間、恩寵等の問題がこれに続くことが予告されている。先生は一挙に体系の輪郭を描くよりも、まず哲学的、精神史的に見て最も重要な根本問題を掘りさげること努力された。しかしその結果ここですでに体系的中心を指示しておられることは明かである。われわれはそれを見落してはなるまい。それは、ア. の哲学が宗教的体験の反省であり、その理論的回顧であったということである。最初の三つの論文では、中世哲学の発端をなす真理の確実性の問題が種々の角度から論ぜられているが、それは現実生きる「われ」の存在の確実性を土台とするのである。次の第四論文では自由意志論第二巻にある神の存在証明が取扱われるが、この問題もア. においては体験からはなれた単なる理論的なものにつきるのではない。第五論文の知性と信仰に関するものは、ア. および中世哲学の中心問題として徹